戴恩記　下

316
61

伊地知文庫
文庫20
320
2

戴恩記下

一中院入道殿ハゐん帝の勅勘にてさすらへ
給ひしを幽齋丹後におはしましける
を哀ひ給ひ生れ付絶利なる事諸人に
こえ和哥の古今世にかくれなし後陽成
院の御時よめしかへされしかば古今を伝へし
慶長五年八月中旬なりしが御前に
て聴聞の衆と成給ひけり
思ひやりの外にまゐのぼりし雲かゝる

伊地知氏書册

又かゝるとこしとやとやらんよミ給ひしと侍
るうけたまはり年々や丹後よ穂武か志と
見ゆ十九年おりしけんをよミ給ひしに
此乃御繪ともまた人ゝ扇よ書たまひしさ
出御出見穂積よりふ丹後人の記よ承給ひし時
幽つ云和哥の道をは奥りまとてまた人数
みかさ出雲此古老磨ゝの家人の牢余
人別在おりしも時の当在七々年よ花とら
能をさし也是新なるひゆく

萩藤あさ川の里ふ手向押さて以
見るを松とそうにとうやとよのまひし給
務の御哥ありと時よ当りく人ゝ称られ
侍るさ此人ゝ后よハ萬代紀年代紀のよミや
う京二十一代集乃名字假字乃序ゝ并
哥の中ふ叢の事ミて数ゝ条ゝ文つ重く筆
此は練尺人と穂字侍りつもさはなど萬百云
物る倫説の新緑とよミ家勢を年紀紙
よミ九まて哥書をよめとは家の友達とて

またゝ絶しよりまかふの出来ありて百人一首を
はじめ草ども人の發起もなきに撰集の
なりまで大事の名目なすとよしありし絹ら
けるどさへ絶しつけさを法すてはかなき
有ならとや道よゆてなよ統しとなりた
古人のいましめと背きば服どうてさすか
し罷さりまゐす今もおひ出れは悲しき
膝(ホゾ)くされ終りて尾とし紀早綫乃志あくこ
よひをぞ哉掛(チヤウ)もまへきどよ扁りそれ

いにしへゆへ新出ひてはなほ一しいてさき世経ハ
さりしぞらしさよげ紀時ハ思ふ意画たす哉
擱まてこそ此人
今生そて色し月日ハつゝふかな
ふかみを袖よりかんふ父ぞ何昊山の麓經(ニ)
のをよば出雁おりやうすとぞ出獨立よりや
つりしあきれはまいめつしさ雅趣なりぞ
やくく承らんと遊旅堂なきぞ法ハ慧文先生
年九月十三日薫録ハ月照菊名不月

月前無。此三首の和歌よて仰し給ふる乃
人々の此寺ハ異人会やしられハ不紀

名所月　　　也足

名ふかき秋乃二よのうちやま
のちせかりても月もち海前集

月前戀

ちすりん月さへうらみかりはてま
これへつ哉袖乃かさなり

かやうにあそはされてひそかみ執筆のうと

無になされ哉。按察宮のこ應經乃人數
なすこなされハ始ゝは弱んちかは同しかハ宮こ居
この末やうことこ出白らん宗よ出人へむかひ
按云ぬも志てらにとかてこきちと声にて斤
云とのこ云ちしつ志む新あつて此は哥
三も菱こよそつまけて志ふこをそつつまやう
古哥を志てされハ出歎ありしをまとかにはゝ問也
病。問ぞ病事以平気の名をて毎人されば
病のえ毎をと以ろは少ねを廣代哥のかは学みなれ

しかるむとのことゝひかれハ毛桜よりミ緒
引しば樅山ハもころとつけたるおほき川さへ山
山の名ハ朝夕吟劇しかんかうこゑすりしら
まどひる又よミうたハ初心なる亭ゟと二方
よりてハ宗一方よりわりや初心ニハおもへりと。
下手幼志のまなこもしく学ハくきみ
つまかむしと。我さきに往くの志ふ花もここ
とふかやく絹とうつさをハ好まるとちうかうさ
くてハつまの亭とも光えさうぬふりと志

てハつまてあらき志くさうひ始かけ附あまりきに。
にゆく志く梅ハやく花ハむさとそこ家へ
こゝ亭とハ花をかしぬなりぱようく此味まへと
中られとだく帝人のほさうれしろやうに雛
学ひるまへてあられバこ首をえにわつきき亭よ
ありこく事なそてぬれ亭合にハ唐ともえて
雛鳥あり麗絶のとゑにハ穂くしきらに以
雛なさし心て鷲ハなりしうと神めかさ
たるてこそ松しられてかゝられて緑め

宗匠なる人々わが奥山の宗匠人数を定
手をさへとらしくえをねがひ申さるゝ藤よ
てだ正満宗乃御手一首筆まるの全集と
中ちよぴそゝる寄起りぬと入かめ川
是ハ追ふみおよびかわりにぐさくすの
さいひらくし俳の正満宗丸御手婚ひくしみ
半付役かとげきらひなく入ぞ神よい唐乃
に手ハかりとさかそぞそくしぶをそくら
是くまむ股をなをてぞ次の手を又そくしぶ

ゑやうよ我々ととそしられてハ人の手をいかゞ
むしやうしさことだつひよ我儘増ちして何れの
よれも拾さうりしめりさぜ出宗の付て太閤丸
らそハおふおきりくやらんぞ記神よ半付けつ月
照前とかひ説ありて
さしとへく山端の前とてちせるや好もし
かりりをぬ秋乃よの月ハ手もわけきこしきを
なすく清くそしつをかれとも中院殿起へと出
ほめく是ハふ寛むのもありと御らわしうなの

こゝろよからぬ折ふし姨捨山の伯作は姨の名月
のおもかげはさながらとしよりさまに似たり
されバこそ守の真似のおもかげは撰桜を
て歳まつりさまをげうさうにふれしらるも
飛脚を出さしむて此家の家隆のいたありて
もぢ借そしられたへさこゝろありぬとゆも
のはまたの師付と交りてさへさへかすあし銭
ようけもまうぢさまよりおそからず雑も
見しつまやもけなすが能舞さへ上手下手銭

えちごには紫菜されぬやよわまへはかめぱ舞乃
おまへにまおまへはもんてくらめぬ物しぱおきさん
いさりぱまりて如前の普悲と舞悔るます。
上方よりへ町ごときまへとき仕かぱ伝ふく
ゆきへはまれいをえよのまぬゆくぱ人のかぬね
どうしてこゝろへぱおりしろこゝろはとても
気傷して行りしろさ物といふ人なくし。
それはあさらぬまも似ぱえそしらねされ
うれ行りしろきうこと人の気さうさうる計

とゞまりしころほひ、まつりことを見て機一人を
めぬきしハ漢土にかやうのものを見てうつしたまひけんか
よりてその後しるしハ手機なりとだに人乃
世をとりしもいやうのまゝやまとの古き事にもほ
作られしかれど後ぞつゞきつゝちとても世
くにしけるまでちの紋を用ゆるとはいひか
う別の紋絹乃こしわけてありとさりの年まで。
きこえけるべきことにあらん
一綾地は縞ハ絲也人乃信人ハいとしたべ人ハ三千業乃

うらよりのを出殺せられハゑかきぬいものなり。
つゝしと世のよき物を見たちもの運ぶ卿ら
やときさとを見んとて織人町人までの御
方よりつかはされてとゑをさせらるゝ日本のみ
も花の筆赤ともとりて宮居へてうつしたり。本宮
なるまで諸卿をときたまひて世をしろしめて。
宮も西陣よりうちあげ品代乃文字村里
体とその運びの遠き方をわけよ。庭上の
して絲をわりうけ同系へ下らんとして機

小川の連といふ所ともだしとめがたくこゝにさ
と嫁しけるに此ころ人々にもてはやされ梅花流なり
源氏物語などの事につき吉房乃作りて家巻にと安
此と作り辛労の功つもりて世にやはらかん。
王朝より家筋にもうを天下のこまにとよばれ給
ひけるとは清房よりは知る紀ありし梅花流房
はかれにも合の宮なれにこそはゆかしかりき也。
梅花流房は無引人をえらみて名をとつて今の世に。
其時鶴蕊などもは伊勢といふ名古今をとも

されどもげに家々しうりしにはなはだがゆえてさ
やうに作らてそれやは甚いかぞうてたえて雑
義に及ぶとやしをしうたぶやとよびといふ事などど
いうさまとは綴んあまたに俗人の男女うがつもら
とうけくはありしがやうの振舞するものはなん
ねようなるたもまもかとくづるにはゆかしなりし
と幽法公御物語なされしなり又此紐色法
橋がくつまくねがひさへりそおしまいてをすを
あまてもげもてうち古人にそ作のうちろねみま

つまづ時光よかくられしがまゝこのとし小正月
とて稼山しろとへよまう世はまつりけり時
と云ぶは祢也稼名徳庵は忌日よは墓へま
いらねまかしば生をわされぬ成也光とらで
め今法のおもふ事さうへ年老てぞやうみ御
乃思をたのんすろまわりんやばへ失られし
と告ありし時然法云ききしめてぬかくお
しまをかけとふ結也は寺学なんとさ遠
てかりし人と世よやにあふとてされとめ

はれしとわろそとや上られんばきととよ稼名院
殿といふ人世よおりをぬせしと作られし者也
金玄ありしや搗学りん去はいりそめりを
時乃名人よそふへときまなりぱ又ある年老
夏醍醐院乃御門祢道澄和尚にかぎりく。
百日三井るよれわりに宗紀八は様剣りそ。筆 タカ二十
みきりよびやちへと系らん運ぶなへられは執
筆をさかんとて光とおつまらはぴ去は去三
条まるしとまうられは鴨川を渡つまぜ太学沼

乃御の總遠水友益以上四人の志賀の山越をかゝ
てかしこまりて參りぬ。明ぬれは西山にかへるな
しれんをえ給はおとりくだりひは姿を見んとて
あまたまかる雜子鶴のあそびをえてぞあつめしそれ
立雅とともにおりゐてはしらかへりかゝり御白雲樣
院殿にて
　山まとのひかりをそふる若葉かな　紹巴
二日大覺寺殿にて大覺寺殿
聖護院殿のこゝ移さめやかくの花　全

三日
　山かすみ松かさなりて八重井乃櫻かな　昌叱
この花乃宿坊の名をとへはしらすとて忘れ
ぬ二教院ちかく參りしに大覺寺殿と友益
とふきたまひ紹巴ハいさゝか人よそへてよも
まうて來ぬとて抱きつゝはたゝきの花を攜來わ
れらも扇をかたへにありしかれハ常に庵
の主やうとゝ攜る殘殿は作人ならしと終り
なひかへ又ある時紹巴法橋扇をまて手向の花り

しかも油乃虫色と名と二人ハ聞ふらく灯さ
つまらぬ事を連衆一人ハ目がね紹巴自ら色と
してだりしけるが
人よかうしたハ何りよせんと云句より
一とせ然八秋の山路をたる時鳥と古人ハ発
句よあり。連哥ハ発句よよりて発句あるなり。
ともかやうの前句あらハ後まつても付られ
そうどいハやうよ一句の風雅をさきまする八轄
ぬよよりて付句ふよの事句をきたりとや

されしき文の時紹巴乃此句なりとおもひき名
まきんとや古しり八まま中で毎月ありしてよ
き句ハ其人乃思ひ家もわりき時ハすゝく葉
しつりふまハ毎日わりと芸あくやつま居り
とのことゝろよりけく葉すりまされ家し
芸ねんと出て打越うちまくあるれと
やされまたとにも花なり調子て猶花の芸
下小留をたて稽古をしよるこハまゝ丁分
身がれハ我面役としてやらんわとよ月次半

出まして緒外乃葦原と齢りきぞ我か一つ
ときこれの言よ必連宛よハ知られきぞ死か
父と後よハあら言なりしうと呼なりし
於結巴ハ度々中なりんと志てまひられ
きて死ハ父伝むけるやまなん御ハ以て打
なりし運平ハ去年なりしとゆきぞ結巴義絶
乃後もぞ我よとなりしなりつきかぞおるえ
新発意ぞこれなとそ小川の家利を望
きて死をよひなえし御手そと義絶乃れ

おりを妨よ柏へて一晩乃蓬亀遊於也結巴乃
篤実よてもわり似使乃あやまりをなりしざる
れとかり使よハ今をいろへきすせ文は結巴旅
懇代おゆきへとぞ今のゆハひとしと也鑑まき
き今我ハ寛なこときまつきすのとぞよひよ
きそ佛よそ念出ろよつてりなへきだて一四通
四後よて挹とハかさらんがもころて大罰者
今て枕野のとえ示よて辻切よおひても
急なもおいんぞりくられか刀をうえひ丸侘衣

さよかめられし人なりしを時さしかのふしぎお
つまづくともなきさがりそうの手りをくだ
かしは此紹色をたまはりし也まへて雑人ぞ。
れをいりんと見んまつされしよぼおくわこつも
よ人は今しば孫忠ありされば法業るのつゐちを
動をしては理をされしは功徳よりば仏法
大師のばりふかく門そうよ化しおよび人見れ
やさば昔の文字聖人のごとくぱさけくみても
まことにさ事とんてはつえりよ。猿をたてゝ

先人なる人をいそんじられし久しく落おそれ歳。
顔相かきみして眉うすく明らかにひとく久しく間にみ
て鼻大きくわきさやうぬかにくみくろうえて。
耳輪あつくぱ口大きさよぎうつあひくさあり
てされしとせさろてもいろうるやうよ紡りたる
十二三のときさ髪剃てあひしよ。綿帽子(ワタボウシ)をか
けきるをどもくわ見んろけてさんしくみまい
うかれば声こりきよし事ますそのを頭巾をそて
をぬいば此子思ありばた雑思ひろぱ又此人出家な

なるハなるにひそこうひな達ハ今年までおれてな
らさめハ小人のおや伸ちハかさうしとふくだ分
世の人皆色々おやまちをなし侍ややうにするや
なき付焼若焼ハ出来の気よ見えてうし川
と云なり

大ひとやまてみたと人ハ常しのたけぬと
思ひ付ありひさし次第名利もなりても約めくさ
形まそ新しく入かれハ粗よせよとのなひかれと
なり約乃ちかてよるま

雪の言わも時分しぬうらとりよや生
句と付さりし不食るそ約めくきい而とえ
画く付さりされとも雪の言ねとりうりる
定よ迄かれとも出く思ひくなくておろとハ之
画りそすと雑しありひりを後日よくゑうう
ぬ読あるとつきとをめなかひなれハ
中それ云ひるさるのあるとも那もと
其のえらかくとなりぬつきうなべ又あて云應
なり家あ

出そそうらのやとりをハ志らしと浮舟
のまうきれんど蓮花の紙りそ志うも月なれ
よそ待しよ吉野の鮭れとれにとよ付よとの
あひしのり能れハ月乃句もさや作りさる鬼
にせよとさやられあひしりは
あらきの雲ふるれふ空乃月
と付待しど豐は乱よ新り申しつ眺日雲
月の句持勝ありされと月ハ露涙なすとふ
とそやとれ雲よハやとうへりんぞこの句ハ經

あれともむかしへゆかしぱやうの所をよくさとし給
そこそこのさき連歌師といふへ紹巴亭あり
にやと都しまひられん
夏乃秋はまさよひあかしあけぬる紙
雲のいりとよ月やとうさ森しと
あらやあらの奇とうりしつぺそあいりぬとくめし
よとぱ発句桟婿ぞてぷをほつよく無に
ゑとみぱもそれはしさ言よハ極めされし。
丸の文ハ宗鑑乃いりよりしっぱ古実やや志

まうらん庭訓にて云。紅色の衣小袖をくれな
よろしきをせんと云。無益のせんと云ふ
ことは別して浅ましきことも毎に付て云。
紅の衣をも捨て都にきらへてとゆるさまし
なほよき連衆とおめ給ひしと覚ゆるなりけり
食の衣服も式に治めよと石の者の方は一向
も雑にしまひしまつはす悪事をいひつまずも
うちすてぬまゝにて手付させもひし徒
中の先相伝へて食物を云ふまじきなり

これと花とはわかちらそれやまかんだてにし
ある物語あり。しかも物語のまゝなる人みな人の心
持よなる雑勝のまゝにてなりたる附仕法へ
雑談仕り。次よりして其中の盤居は親鸞
聖人なり。これは無学なる破戒の身なり武蔵国にはし
借無益なるわりを仏生界の浦山の夫民ともに
りんとて下間一人つまて辛苦をわりしゆへや勤
ありつとも先ぎ精をきるはげみにけ信様富貴
すると見ゆる。稲荷精となりて家ものの念力

にしろありがわの庭に立石ありし会錬ととて
いのくぢうここねらで下ど、わくるまで歌ありき
寺掲ハるとし見ゆやぞの志ろしわきハしそぢへ
の名しむ金銀とありくぢ稿まうしとありへ
ま常たれりとのまでりぞ又あくししきやうな
れともげりもとそんきられしハ日野大納言殿
信むらひよ出ぢ太坊はともものありしと見て御
大名ハよく存しおのゆしも氣皆ゆり千しへ戸
志れミよ疵と付ゆしぶくいけりよ申されき。

若和し立つるかな乃さりハぞりのがしかはまよ
し死りとなる人まハ手もきせ黄もさやうよ
立つゆくも宗祇など氣味よく割きとれ
さりはるやらんぢ孝法師思案して主寺師
の傳よハ五十とわ関の文つまをとぢ知されれ
きぢよりをもせんね掲ハるへきまりや又の附丸
高ありよぢくつまでて余り志よぢて絶色出給
むつかしよぢくつまとぬりんと打きへよるもしらん
そこハ利根立て出へハ方葉ありぞれぬぶざく

是のうゑこれハ花谷へいつきんやしきあられたるを
もまた難さあんひけりて候えぞ又世ハ倍さ
ゑんかなきりのありがたき事の前にさまよなる
ゆへハ義政関白豊臣三のと申し御殿古あり
しかれバ後に紹巴毎日御機嫌をうかがひけれバ
御様殺の御縁合の人数もやがてれたるなれん。
三井なとまで流され百石の知行ぞ下されて家
紙屋なども思代よりき宿ハ家らしてされ。
わさ侮しき前とおりなひてたりしけると。

笑止よ御ひざを手の志りもと霜ををそで丸
一人身つて参りさば播丸が名を史付なけ
うしなやむられなんず名計出なひて丸が
身と川奥なる住家へひきこもりたまひさう
よくもたそく来るあんりが長乃は照ゆへ終数
あんとげんの舞の御役をあるまじとれ高
とうきんと志まふよ外さりと世上のさんたん
みなきめくぞうし河を近見してん実
のまちうしあれとそ丸かりしをのこうひうきそ

中椀といふものとうりおろしそこハ下壷なる
まへは猪口なんとてご飯さしわたし
あひしかとふせ八ふうけくおけされハお名る
こゝろひざをたゞへそとゆきれしかとぬ九
ちのこ下壷にてあつちしうとも挨拶ふし
かきもんおほくたへさつはつおかしめされ
とんりとげまへにそて八下壷とも御りこと
さんけ申挨しつはち村打ちひろむぞの
かく様に礼度へ日比心おとめしつまかり

けりに流派そて仏前からへやうぞ盃とハ下壷と
申ある事とあひしかよくぞふよ挨拶あし
をもは細く侗合の時日比とさせてハ酔てゆう
よぶ前一人をめへそさむるもぞてあかり上
壷とまてをまうへきよくやりまと下壷よお
つゝとさ交をん人へ申おとも事ハおさそこれ
服をたてつやさ御り伊事もきやうおか
おさそだくこを事ハ様にかわくていおしき
まふるかるもこれらのましかまて付

たかをさゞゐと見れバ其句の中より
　これもまた世にそれさま待
よきよのことなさんとするやあしからん
と付られしぞ世の人も感じけるとかや さ
れはそこ此わけを師とも称し崇め奉るに
ん中にもわれもうちまで大宗匠ありしあると
能人はなりかされども昌化よくされしなれば
わかとていへりかつなんらしく人にもたのむよしに
昌玖たさするとうさるをまかり念ころ

もくてミ好さんれたしへしわきまよ信ずべくあらざるや。
そこの志をあらぬ葉の末葉乱れさてより
ぬ。諸の玄妙の風雅とぞの風しさしとぞ
さてハ俳もきれひとつの遊しば安
撰同編をし桐杷富に俳とゆひ重なるも
前なるよ俳人にもたそろしかど当つま待
な配しき級なりしだゞ指枝おさりし判
全をも蕉門あるなれバ壺の へ去てれさりし
小よりかくなる俳しさ弟となりし年をとどり

かゝるありしと碑なさしめひとれば見んつゝ
らもあはれとおもひくらしとなん侍りぬなど
ことにむかしてやさしく何事もおほせ代なれ所
ありし唐の名道も我朝乃きんもけの君紀
よはのかれなれば短なくしてさらにそなく
ひとたびしばしもおもひつまで日ならばそく
人とふみても給巴乃巴の字はづともなく
ともよめばなまたあはさるはいとも色文に
哥とやしはおよそ書されば一生乃内み。

は業のこくばう書まよ紙つかへさしく花かも
とへゆゑありき
一首よ息がてはまで首のよしかしきつもとは
歴うしんはよしあし志たまはゞよきと方志つも
なまかそされは其御の首とらも此息は我この
むかしの一神のことよりけ待るが首つらよ十神あ
つとひそしも字やの余も侍りとるやはつま出
神まてもようき首はくおかしと成はかり色侍る
ありだとひ家もこのむもとこよあはれともよのき

哥なりとハ思ひとすべからず
一基俊の哥見しりまひろうしをめくとおり
ちとろさきん後撰集の中にもちらぶ哥
とも有へき事ぬとぞ此哥よ事ましくとりへん
難くるとぞめぐらす批判してかへさ侍れ候
はなよろしひがとらさてこそ金吾ハ秀逸の
五人にわさわり後撰集乃哥と難ぜしと
て世にとそしつさわりしてぞむかしの鴨
長明のあのきられりば山ひ後ころつきちありも也

所もとそあやまちよげ山田勘へなりされまづ経
自性のしてう描写なりともやと猶し
久しく織よあこしのゆるこよ付てはしめく
さし経わたまりと志りぬべ何ともなく付ころなの。
やうふ蔣台もちまず前世乃縁ひきとも
とく誹諧歌し給ぬべき詞今までおもき
給ひし物の本ハおりをぬきやとたつ待りつ
ハぞこころつの掛とおもひけりしをぞ智たりしそ
してなりと新式目の掛さては梅花院家よ

うつひまりが浣頭称の経拾芥抄のとくを
とゞめて付立侍りぬれば頭のうちにもせさせ
きしまたしかれてよそれはうるさも末代の立迹。
さやうの事どもの世によろしく人おかしく侍れ
とぶらくかゆる事もしなは後見ありきがくら
ころかとみ日々掛てむきしらはぐと油中
と云
志かのうやよせきてこれらは後も
そのよいはやうてをちらそかつりんと縁し之れ

ゆめのうちにはおさましらずとも文字の手習とさ
ふやうにみえてかへつて恥とかなる也ぞと
〔もしや一〕集とえらび給ふ一瓶の立花のこしらへ花
と云ふとて花ぶりことはたくもたしなむさ
草木花枝のおもひかそくみとて花残はなは
かくみりかまとぞれくよくぶりて用とゞてりぞも
立花とよびて花ならぬ植木乃切えたとは
うつりつゝおもく見ゑて花瓶もまたおもて
れいとて花とするかことし後撰集にれいとく

皆ようきなりんと言ふハえんこも者のひつこしや。
秀歌と定家わかに付てよう〳〵ぬ歌をもとめ
志らへしハ世利古と一紙ハ一世界と成し人
の一生涯とさこらとふりぱうま乃集を皆
くりかへしぱ新古今和歌の九家とえらひ
まひよもぱ上宗上生のうつもぱ下品下生れ
歌もぱ人丸の歌おつきもやぱされハ人丸赤人
の歌ともぱ歌人ひとつとなし千ぱ後成にのる
新古集撰ハれし時ぱ是れハ人とハ見えてぱ歌と

のミ見ゆると仰られしも先よのもぱ何しも此基俊
なりつかの歌人乃名よ恐れしとなりしたまりんや。
三ミ難し歌ともとミハなりしれ京乃歌数千。
むかしよ歯つよるまヽとハ廉なる事をもへさぬよか
ありてあやまりとハ今の世まても存せば家ぬ
ふてさゆへなりもぱ此道に恵源乃継皆をゆへり。
いつま乃時よも歌人をかなりしたるへすくなきまゝ
に栂(トガ)なき基俊とぱさ人よなりをりぱ世の刹さハ
亡かし私と見ゆるに基俊のあやまりわりまヽとぞ

ほそのきられたる底心ハ俳諧の盛衰とそれを
ては其俳家の邪道を嘲るやうにおもハるゝ也。
さりながら今の世にて人々の実の弟子なる稀ハ
同藝になかなかさしいふをさらにとみにさりなハ
俳惠乃弟子なり。俳惠ハ俳諧乃子也。俳諧
と其俳とハ同時乃名道なり。西惟ハ子なりと
あるを知らずかはまれバたゞひとりもを非と見ん付く
ハ邪きられしことなくさらバつまて理よわるゝなき
ありけるか今見れハえうなきさん悟乃為念也。

されど是にハ本生乃結字より出れバ用にて
つ争ふを里ハ是上よりくを時代の手ありて
と見れバ年代の連歌師等と此ハおさ数のやう
よにくさそねむよハわづかに文字乃のましなり
しかるに見てこそ誹諧乃批判にも到りてハ留
乃趣ありふ所るくとかくれハ手にくらむ賣文
西ねのハかりめなりハ其俳の俳諧の為とわ
とかくれしまもれたるハて俳諧ハ無学者に
て人の念ふことをやうそ成統とあしてハ乃ことなる

まことにうまく海の句と難じ。又古今ままになき
詞ともわざくらも作出し。おもしろきのねさな
とくよみ人。又氷にかゝる事などかれと古今によ
ハあるとぞ。此後難ハ氷の心を捨て身のかたち海の
やうなる海まで上手とぞ基後後とて。後
難ハ此后をとみることを今の人とやされし事なり。
是みな理にあはぬやうなる批判なれバおもひ
ち中まりてそねみなる事知りハあるまじき
趣し

一世間の人。雑ハ上手。雑ハ下手なりとて。哥の所
めそしりをする事こそ。又よき文らしからぬ
るゝすれバ手前負くさに。ほまり分ても
まかへバ。かやうなる申とて哥のよしあし
きわしきあしきとは。志らぬやうなる師匠
よハ作ましもぞうまそのそれとぞさつまとくお
しからと思ふるゝ批判なれど中々の哥と志り
まことしに哥まうさらぬ也海で師匠の所
人をいさうも志らぬへはそれなりて善

悪をいふと見てしらばあらその御許ありて。
先々父をかへば我まづそこしる也し先は許あり
それ定めしの品々とう心得んと次の代よ
しれ此ありやうだ人は親子の志し一越絹
と上絹とはたまて半里ごとの十数ん
親子のいさまて通されたて志ろ人まれしかなる。
醫師の脉も先よ知れしと見る人のやうよ
在名を孫をみんごとくれ手ごとに
候し

一 若時は思案ものさして人の物をもとむ也
まして当時永若の年まて先々の様な刀
刀の目利は本阿弥末やうもと雅治よわさ
しれとも国の銘まてとうしぼうくなめ門家物の
まは疑ふもなく心を付候人は後者の代のを見んにあん
物とその位ろくに成しもて物まして諸事
西川のやうよ慈孫もわそうされ我は修業の
見やうよ家隆とてもよしとなし一種よきされは更
よ見んわけなし時代の事を弁へて覚えるやうに

つもと給つもやきてしくだされハめつらしくるまじくさう
ハんじんとてあまた承知と申人御入ありしかハく
多そ飛ひ来りしさうきもの十余箇年付ても
てきられたり刺抜んでゝおそも擬疑せんびこれを
右手の足ハ新弁と申ありて他ありて足とありて一下
花堂宗勢法橋。平川かす唐なとみてかれこ
しつんそんし給ふ一輪の聡よ及へてこまつかなり
法道の冥加あるく天然仕合よく候ひしとも是へ
ハおやうきまつあり後生のさる楽ゆめく

かやうのたりにまさる出家へくり給ひ目録りをよ
しんまかまことふるきるとも法印顔子きく候なる播
ゆへの懺悔とあるべし大六丁目以前宮家
御乃法弟を召寄られし其気りよおほせさ
家人まうせハ先々夜ん寺あれハ見ん付てこま
まくめくしつ大智国まもわかき僧こ成ぞの人乃
よきはよおゐうきるれを三ヶ首まうせておかせ
られしぞ是をも見んとけてみ仁給ハぬやう
申よしかき沼申すくへも世尋にハあるわあり。

嫌ひしてハ斜なくて侍りとしるしたる物なり。
とくしんせぬ人〳〵の事にハ批判無用なれ
義なる人へし。未生用心なるへきまゝ也
一座人の点尤の事ハ作をあらひもありけるとく。
なきさまハ前しといふてもまうつしをやさし
き詞なきやうなるも人のめくまとりぬあるを。
何事も時によるへく人にはやめらるゝやうよ
なとくはんを精語ぬとやれと申人のかけるを
さやうみ吉志てさらへハ心実の友ありけれ

とらん人の中をしてさてまへとゆてくり。
丸さまを学て御恩ハ三郷まし師のを
し人すくハまかれくもや魔風によられ邪なる
ゐよたよりんをめくさん師達のけん約と争金
て未生に歌詠よりとて和哥になをしよ論しく
されおもひてけ戴恩記となんて。一株萬寿
仏乃回向よせん師達を読めんなよ田ひ会
拙なりし師匠なき歌人の年経り功積
廻て古稀のまりハ大きによやうゝなとまてや

まことゝよめるすなをなれはつよきはなはたし
かゝれは人の心をもなくさましはなくさめぬれは
へは懐英をはなちうひをぬゆへに上手の名
もそれは経なき道に氣をはくさんよりぞ。
世上にかゝめらるゝ分別に志ゆれはゆるは人の本なり
ものなり世上にかゝめらるゝゆへに天地とも
うこかし鬼神をも感せしめ男女の中をも
やはらくるはたけき武士の心をもなくさむる
ことはり家々の宗匠にはくれとくいふなれはかれたせいすこし

倭歌成なりといへとも雅にかゝりあへりけるはとま
れなる由まさなる當世はかくしてもなにやうなる
事あらそへは上手とかゝめらるゝと第一の美
とおもへとも元由とのたとは天地を始の為
にそあるもよろしきさまにはあらすつらぬ稲の移
田に生ひしまりざる粟丸そのころになすらへこ
とにへ変しても夷狄となり再変して禽
獣となるとも云古語には元によそれり文和の書ん
和字ハ中和の和なりしさとやはらくる所の得に

わけて中和とハ孔子の御孫子思の作中庸に中
者天下の大本也和者天下達道也致中和天
地位万物育焉とし和の字此からそ神道には
人心にも叶ひ人世をも相しらるやうにたくみ
てやはらぐる事にて候ふくくハ鹿神とかんせし
めん又定家卿の御事と俊成家隆ゆよおよハ
其ともいつまで是非一乃御事也又定家これ
父よむかひてのたまはく其建保の此かひとゝた
事もやたくお待しかバこころハ読ふくてあり

てんのおもひける事も侍らねバいかやうなる心を指南として
よくハ人さえ読んと定せまほしくハ俊成卿の作よ
ハよらせておも人のめとまでだにとのよく事を
ハよらなへして前の今此事こそその御骨
髄よてさつまなくハ作を隠しやましまれとて
年老て稽古志てさへあれは肉の衣あて
ようつひ侍らまのおりとおきなん人ハ家隆卿
森生て後鳥羽院も摂政殿もおよびさ
まじき事よハわれこそと志すよハ定家卿

作てぬ月のかつらと仰者の御心より
承現しまいてまさらにあまねの以一代のみす
とさりしまへに書の名をは月記とは申也
かやうにいへば聴の叙祭作しても藝あり
藝者人ありとされまて抱のかわりより古今に
古今合やさ失あひしらと成古今合叙山よ
歌け並まてしと志り情学広大なるか書ましこ
れをて知へしけにの眼とみんまへる亭書た
古今集一部とあり後されかくの方他乃

中まで貫之と御逝と定むつゆきは丈人
丸と御逝とたてさめ給ふしと見えて候人丸
世よ出なれは我そて候人丸の形跡世に於て
らんつゆき古とえられとふてそ世よ
人丸と稱歩の本とあらん宝家は歌正と紀
されさんは古今集を撰び給ひ且丈百人一首
秀哥大男可孫云太概為中は異朱記の手を
歌しても功とつき徳をのこさりけり代は
甚絶よ実なるかよるを当流乃秘傳よい人丸

思ふに定家卿にも和哥をしらざるとわらふめなる
事なりけり、たゞ小倉山荘に百首乃色紙
を書なされしハなけれバよりて志れり柳営の
又いまだ分れども古今序にハ六義をたてゝ四
条大納言ハ九品にわかち忠岑十体にわかつ
むかしハ外あらしよりかくしといはれたる
そよ定家にハ花実乃考へつゝに極めさせ給ひ
花風実体とも常に花風よ其昔乃歌も
わり定実体にハ一実とぞ云ふ二家ニ云也ただと

但ハ定家卿ハ一代乃作例の三変乃内に小家
乃三級変をとらて極実乃二体をたてら
わこと〱し。其道の花風ハ専らてかなりわ義
あらざれと定実体とおもひて花風と次
に用ゐられたるによりてハかきなき花風
さへ定体に色ねて其ハ思ひ給ふへきなれ。
万葉集ハ来るや人乃心淳朴なれバこそ実
体をこれもとよりてに実情実法に花稲
めとつゆきハあけされまでり花風もよりさ

かゝる女はかへりて世にもまれなりよつて
も賢女ハうつくしきとなることもいへハ人の鬼を推
て小野小町とおなしくすへし古今序にも文
ゑハ小野小町かうたハあハれなるやうにてつよ
からずつよからぬハ女の哥なれハなるへし
とありされハ男のまねするはよからぬことゝいへり
くちらすまかさやまとうたにもいと
ある手跡まなびてもありて儒書など見て三十字
よつゝねにハはや屋さへ玩ハそえなりわろく

うつくしきやうにも律義にたしなむハすなほ
なれさてやはらかにわらく媚をすゝめたる人ハ女の
たしなみ何にも婦人にゑけしき人をまもりさん
とするかよし男ハ剛女ハ柔男のたつねには
ゑ抱られて人にゑられ様人といはれんと
おもなるもをはけしめとらしたるとおもそ絶
衣裳にたしなみ髪に紅粉とおろハみかきま
かりそれ共にもあるや机手本ハ筆硯のす
ゐちよろしめのむまのよハおのれ難波津あさか

の詞みな天下をおさめん君臣乃道をときの。
紫識のかくしとする處なればなんぞ花鳥乃
よそほひを用んや。実録ハ男によらぬ男と生
てハたゞしき武士にありけれども禮儀をもちひられ
と存て身命をも捨てしぞ忠臣となりしせんぬ
んかゝるまのなりされハ男乃よ用ん言よりてか
雖よハいかんまし好んや。しし後鳥羽院
の御とき泰女ハ大よまふく枝をハかゝひて和
そく戀雜ハ艶よや仍見よ用んとて三神

を出されぞれも一座のまうて詩文戀雜を
うり給ひそぞんよやさしきをもとせらるの
たまひされ御手乃言葉んとも諸やさしきまあ
との給ひけりしすそおのみしぞつくしき言を
よみてぞ人のよからぬまで樂乃御經とすうハ文
よ通じとの出よおもミなおもぞ実録のうへ子
をのつき花鳥のうきて出さるゝ表言をたの
むもそ悦のうれ悦ぶもぞ実目にするかを折り給
しとおふたる縁ぶの附なさまや面白あるくと

も師乃をしへと称してかりよ歌のうけ旨回
らそれし々甚らしと歌合せしか歌乃あくらり
こゝ哥乃さひろやうのぐ今まてかく人の沙汰
ありゝやうよ歌に乃あつらしき作りあり
古今乃心画のかゝみなり花鳥乃あそひよ
しらすまきと思ひあるへき扱ありともとえんと
たゝひとつよめは後に思ひなりけりたゝ
人のあまりにれうくなるたとへようけ給ぬ
きはのならぬ也えぬまたりの色もしはすき

とふ人哥乃まよ人のためえ侍りたまへりと
をいつまてそれは後世をももとめてつまとりと
平家をもてあそひ好士とすも哥人のす
あり鏡をも今業の湯をわけ出て数寄
とつよハ哥人の世よまさされとろゆへありかたやき
しき哥えよ徳ねよわれて花風ともらさと
たりふへしと一ちちの義ありけ手あるえ
とえしやまし詞此たひは人のおんこゝろをたなと
してとわきは哥まそむいそゆる執ありちつ

らず或女の歌とよむ男ハ腰病のものゝ也。
小町が歌をよむハさながら女のなやめる独おな
きハぢしてなまぬまかれとも世によわ
き風情をこのむといふよりてづまたり
あるとらむる縁なりと古今の万葉集ハ実神
おかりして花風かはれりぢもなけれとさ
まて花風に成ることをしるして今の世
中ハ色につき人の心花になりにけるより
あだなる歌ハかなきことのみ出くれハ色好

の家にハむもれ木の人志れぬことゝなりて
まめなる所にははなすゝきほに出すへきこ
とにもあらずなりにたりと書く古今集ハ
花実を對よおめりどは撰ハ文相對よわ歯ハ
花風さりふるなゝしとぢあらいまりしめて。
実神おりしまてる揃きハ文花実を對
なりぢを代々の集ぢろくふるけるハ。
新古今集よハ花色されハ鏡へりとも之家
此一人歌さまへとし後鳥羽院のはてゝひあれハ

きんだいあつて百人一首とハえらミたまふ撰也。
業乃ころ歌人乃乱出来て三院ハ島うつされ
させ給ひ序とおそれられし後京極殿ハ其世
ありしと也其子ハ至孫乃時そておそひあか
れある撰あつめとそてさら人ありけさ
みはおもとぱ名をとされて定家卿のうらミぶかく。
花風とこのミて恋乃あつきちとめミと
ふゆへよぶかいふうち千ごち家ハ武家の天
下にあつまりし近衛殿ハ猶も花にあり無。

此道をそこれハ其ハ丈夫乃おあよハもとをかし
しとおもひ此五字序ふて得りがたんな序
まる花すきがふ出そへきまゝにて
とそくぶてわるしきまりご言此理た

丈夜

三条連歌のあつき掲をといひよ人ぶん
あり川さちやとえうてあしとよまへ
をけまとおみの粉政も忠則も言ハ上
奈あれどもあ孫乃人よいあつきてだいさ

たのところは陰陽のかくさゝ事のいそくなる
なりや和学に云ひけくちゝのみつけたる物ハ天
の恵なり月日の行をさとも大地山岳とのもと
なるも皆是のちゝはゝ也云字とあらはれ
人は此理をしらば抑天地開闢は一滴の露より
生るところといへり是も露より出るもの風より此地
此世は又行とゝ月とも陰陽なり本
火土金水是地中にあるとき陰陽は東方此木
なりしものにて青して其色のきはまりなる事

四季とはいふはまとつゞきより顕はれ乃
風本是なりけれ此一滴の水より出ておのれ風の
とてふ事は陰陽なりけれはま大唐も天竺も一切
の実國もみな日本よりうまれしものなれば乃
統よりは云ハ尚書の元首股肱よりはじまる
本ハ毛詩よりおこりまた或ハ渾乃高祖の大
風なる云より初りて或ハ仏経より出さつなん
とて其皆禅家也天ハ地も世界國土て内典
外典も神も仏もみな云より出たりとしるべし

しかれどもいふときハ風ハ木なりといふべき
所なり木に風のあたりてこれがなるとなる
なり万物のうごくもの草木のみならず浪の
立つ塩の流れも皆風によりて出る也地
水火風空是也その内とりわけ風なりさ
れば常に帰一嘗てかならず蝉の声をきく
ひとさむしいひけつ物ごとまりうごくともまさりをを
ふくうけるにも此声の字に心を付べし一切の
物のなりひびきこゑハみな風なり風の卯

ゑをまろくなすのハあるき也須弥の四方ぬけがん
めぐりに九山八海ありてこれをめぐりて鉄囲山
まで拘なりこれを鉄囲山とかくべて拘て風がたが
せりと大なる拘は是なしとある所也大ぞ八
本にかくとゆともハいふなる柄なりと字鏡
に纔なり此字の篇に可の字二つ合さる
てあるハ木の枝此つなりいる形也流ていよ
見つつまをかくハ是枝を風の吹なるとも篇ぐ
言篇に風を書もでも篇に采此字かくも

凡かゝる十とうも色ぱ実はうゝくあれは花も
風乃ふれ人は心の趣あるは木々枝のなと
く志しと枝なき木は何の事もなしれを枝
ありて葉を生じ花咲実のる時は木の名
もあらはれなきあし　さも志るなりぱ人は挿
云まてもなんと志るなり。故は挿といふを初とは云
るは草木は葉のなきことし。心をその葉
といふもこれなり源氏して付るなり。古
の代々乃御門(ミカト)甚乃たなのあし　ただ秋の月に数

中にたゞなる人をとめしてまよつけつゝ心
と葉を志めすひさしきなると志らしめん
と決するはさるの也。古今とゝ是大事乃口
伝也あり。然は心なる本也。本は風やせは萬
挿乃情は情乃氣は情の體にして乾坤と
記すも花もしまはるゝまなめなりしをいく
此心あめつちひらけしまあらざけるの時なる
きまよりとかさなりされと天地とならに出き
まは天地乃ありとんかぎりはつきんまじき

たまりとはいふなれど常にこそおとやきものと
さるをも松の葉乃散うせずして柾木のかつら
なかくつたハり新古今よりのちく撰集あまり
あらためく百首乃哥よませ給ひけれハ
あまた続歌にまうけてなかなかまして愛身
何事もおもしろくひとばたこそ世乃末にかゝ
らね掛ハおもかげと哥にも人々さうらひ斎
藤壺三位俊成よりもと見ん侍らぬおもしろき歌
らば哥をいつそそのこの出してぞ見えるおもくな

書付けるハ西行法師
其誠乃世をこの子さけれバかつかつ作せ
思ひ夢路をはまさき病出て西行の続
野楷規乃つけ給ひ侍りけるも人の心の
まことに書や大かれとよ哥の花をされけるに求
乃世よりなしとの法度慈古今の扉此杉よ
大空の月と見んとくしとぞ見へと紙そて只紙
慈こめらもとひけるんに新合し侍りたとへハ
風の字もちるねまハまよしつ時到りぬるハ

又吹出すこともしばしの風狂あり是するハまみ
またあらし吹くへ今はうら子ちうてしばしきこり
また花風狂ともいはましてもみせてく書
何ひとも物も弄ちりてなくよりも花風狂ひり
まそハ国家をもやぶるまで故よ緒の常よ經世
之音ハ安以て楽乱世之音ハ怨以て怒のみするも
狂ことまでも皆言の風よりそ志るまわり人心
身よてさもてよくふれんおしき風ともむみも
貌の様なり

虎とゆう乃三月ひらかれしよむしろかり年
いまは嵐のあらき世乃中なんととやかられ
言を宗なる親王乃よまつりこと為す乃は絶えん
してばまくしき風狂なりとぞ無くゆあらひ
し詞はあひ侍り然ひも楽然はまたも
吟然とあるばかりそめまする言よまん人実
狂とよするは時之花風とまし人てかとぞの
きまりてあきらかさ橋乃まてそ女裕男裕ぞ
しあくあひあてつとしぬめことをも言ふとし

まづ男神いりとなしておんそたまみさ
きしくめ神のことおふへきそやとて男
神たちまちめぐりてかさなりえまし
わひぬし女がを附めることふよりめぐりておか
うわえましあいぬはことば山津穂とはだりま
のそことさに夫との事也。二柱の神は伊弉
諾尊伊弉冊尊の御事也。天の下のさかい
よかつねなれば夫婦の恵しめぐくかようひ
そるとうきえしとりやめることは陰神なり。

陰神の事は都風よりかくされがおかみは陽神也。
陽神の事は冥神也。末代花風盛によりて座
とゞろんまでもまめくおりこの剣してよ見え
わかため也人に掲けし。掲けはなし下照姫の事わ
れらし女の事なれば猶またさうよりあらはれうそ。
是は事のやうにまはるえひきこ事なりとて
ゆきの事まで。抜人の世となりくずさのそれ
なるもわざとまはしわまりも一りいなりけりとぞ。
神代よりまてこ事とぞ人の世とかけつよき細わ

まことにそれハ古今伝授の人ならでハしるまじけれ
ハ宗祇に伝へられし也宗祇ハ三条の御家
に付て取りし道とて十ヶ条にかきつけしる
し置給ひし也是ハ堂上乃弟子此乃姫の御為に
もあり地下ハ宗祇の人にも伝へ給へとせし乃
事ハ其の圖にも世用ふ事なきものとさだめけり
此故に古今集の注とさへ所々あまりにおほく
花鳥ハ宗祇の弟子とおもひし志らず宗祇
弥事大概に風躰ハ寛平以往乃事と見えぬ

無しとあり寛平以往といふ萬葉の昔をハねと
也是によるおほ萬葉の事を心きよう云て
萬葉乃事絅ていともふかくて数多あれハ
あらそ絅ハ三代の集とおほくとれと見付ぬき
ため也さて風躰を寛平以往とおそろしき
ハ此の姿也よりわかやかなるをも人の心綱
ありこれ実躰と知して花鳥をなせ給ふと云
ひとつりてかやうに明鏡之門てみえて云為
伝是ハ凡そ門生の末々も心得まじけれとぞ申たまへり

てぞこの世よりうつりて実辞ともしと思ふなり
とわたりにこのうへまで花実は相侍とてぞ
全業侍乃徳をあらはしてくれたりとも後なる
かれは、えがたきをさきにしてあやしきとにまず
先おもてにも見えざりける物也。其後世上乃
人なれとも、いふ家の元の気をあるは元の始を
云、世上の人はうしとおもへり。後も始はさやう
なりき山花実にうつりめは師匠の始ありしが
さうしともなくてたよきすりんすものわのもの也。一正

近きころ人まく絶句ハ百人一首講尺していろく。
山林の田乃舎をとゝのへめしよむはよめ丸。
一首もおもとハおさへぬなりとゆるされし。
世上の人はそてはぢ家くしやまされとて撰
縦せん実をいふすらあれハ宗家とよふを
いふゝるも先師侍なるきゆへや宗師侍して
正親なさる人ハ花風とこのむものゝたゝ人ハ学
道の法轄をて人まハ教化しなりがくて世紀
閑合をぬることぞさるにけりまゝく統事枕さ

さすれバ此の魚ハ作られし物也。されバ人の人
其志をけるに或ハ天地を表し或ハ組みなか
たとへバ俎板ハ太極を表わす陰陽を切ル。十二
子十二ヶ月。飯器ハ日天汁器ハ月天、小の皿ハ衆
星。箸ハ二親。是の業に拠て衆をなすハ八卦
の気物離中断。ごてき膳の上に出生しる
ゆゑ箸を表すなり。やうの子細あつて是
をぞ名づけ易の菓湯に用ゐる。ならびに是圓
まん物発用の事がましし是れなし給り。

其たとへにはいふるまひのわけ。六義ハ六部をもつて
よろづまへ八寸ハ八相成道の事周あらはすや。が
く。言細に御得なさバ一生ふしぎて六道に渡
よふ人さまのあるべきかなしと
一此道家様の作意ハ心より出たる事
もあらさまにて得まぬ一人の身に備ての
妙なるをまぬきまはひ知らぬやうなるまでもお
まりにたらさよたすけ慎まする物ゆへかねし。ただし
實祝をひとりにえらぬ人ハ挑打ひしめやさしく

栂もられしとかれすひ。ニ生乃る義悪とあへ
きと。毎朝日天子乃出させまへてしぎぐり
まゐしと掌を合せ拝まるゝものしぶし
と大内乃慈也とやしらや。荒れはしたの民
本で耕し日々に息井(ヤスミ)を堀くみとの乏。
田をたみをくくして掌のとく何をあれれ
おりやとらふとゆる。わりとのひろまゆへ
と抑て恨をまらんしよう。そむりし蔭務
を。殺ふ生しまもこのくべ。くれ古礼あし

時ハ所々の門戸をかくさめ。世とゝ掃とかり。武家で
新営をさ。へ武ハ遅滞なとしぶりてめの妹達
より世ありしぶ。まして国絶也の位置もさ
ん。雑役のことく。おゐけ書肝となし。銭主を
かくし。西而をりしとめ待ぱりまと京乱を家人
しくニ吾方わ光源院殿と失ひたまとし
今吾方なるの一家御殿まそて尤りし。我
是信ありし故んまくの國大名をかくしはべら
しく小内弟とらられたまてもぞの志かし

ありしに織田上総介信長ひそかにたくみ
まれさせ給ひ籠城より出張し小数にて見と
けしを義元の陣とのりこえしまへはも駿州お
それより自駿州の城三千六まそ海道にしてしかも
へそくは今川と義元に條事しては今方は本國へ先下
向てしは吾乃三人衆文をて今方とよりかゝむ
よしきこえそれは正月ころの雑煮の祝と
思はしめづけやらむとてぞ手て一騎駒
をやめくを信にかゝつてかひしくは桶狭と

京まではまそてふけるとたとえしまへは京の
花さかるにはくはくふ七年八年紀道しさ
にはぼ六条都ちるへうけつきなひそれは武威
ありてぞらみつるをさひしとおんは湯つけとさ
らくとまつりしや宮のてたてと御出なる
は尾にはぞ度しそをやけと海道つまでとぞ大名に
ありそひをおへそ我もしくと桔ともちに揺ぞ
にてさへんへてあし給しなうろうしきまき
世にはおとしても中に儀なるまつ道は馬此手

かくましまゐらせてぞ上られぬなされ
ばかるをひまくさぬかれて雑兵力ら鉄炮兵
粮おすゝ人足具足甲ハ背小荷てもとこ
夜の抱まそて用こきられぬハ武器の評ハ沢
とめぐさし諸乃書子共く丁ままく争性志
ときすく成へつらぞど時儀よ人書ともそ
てむなてみへ下将まやもとら守ハある人
くらび戦場乃こしとみとなりもそ似雅なのる子
しひ目共おそよ歴然さり拠云条よハ信長云

とそふ小勢り組ねと邪通さる軍ハ肝を
示しぬ色こも共ひ延も度と志有へりぞ守志て
ねらんの宝家よ物そろうてとく信長云一人まん
武ちんよおそれて然勢も能つまさるやう
よおもらとのくて理なつとや右方のけま物
みな百人よも色されとも百ねを一人へえされ信忙さ
ミて二人勢干乃気とありて浮物の方小弱云
などとはしますや信長云兼乃色めくとき勝ん
し脇病風乃やまねさるよ御くおて返答

ちへしぐさらハ我やしくく小ぞのく志給へ。
承小言をひとり仏りくうふへしやま高訳
とれてうさひとらみか付てうりう人へし。小
弁の昂ハ笠一度よ押り居さ藤とくさ縫
と藤乃よまよとく人ね。弁三度んうひとま
すとえしきをまく三わり大へ然とけ
てづさびげと〜しとかて笠をとそふでも
弁よいりくおさのつさハ宮館乃りのや一歳
緒残つくれてり。声もよさのゆかりて採れ

国るの小の本戸へとひくらせ笠乃てしくうへひ。
時方八面一追おし給ひぬ。大軍のあくひをへ
づま立さる人数されさ川てくをちうまく。
如ふひへうる。伊丹尼崎摂津国ハ内わう
しうまれの人数の軍兵ともどさの然残
わりをどひらまうらされハ死へりをとまてびへ。
敵ずい術の名安ちとも貴ぶの中小文て桂
いりて首をとられぬ六条の六日くげまとハ
はまやせ今ハ志てもとぴつれはさてハ陸まり

いにしへハ首塚といひしを京中よ城郭となさし
つ成。西方よりまうしくる人、前後にちりばめたる時
大石の数百人ちからをあはせてひけども動かざ
ざりしを、みなそれ一念をこめたる故とぞ申し侍
ひとれバ鳥の飛かたちに似たるとぞいひ伝ふ。付
も人の氣にふれぬとてさまざまの事に秀るなり。
さん人の仕ゑハ大きになりしける時、椿の時節の兄
抱き三條衣棚にて、おほふとて見い入てのち
その後ハ点束南小田原町へ行ど住

ここしもしる人みなやしき新城の出来し所
根よ御門の方ねこにおほしれたる蛤貝と見なす
ら人金さらりとりるる人そこと志る人ありし侍
志なくききはる事にてこれハ西方の法ちの
三川をくぐいかけたりとぞすすめと高雲
の影ひて志るき物事しとやうをかみひしとぞ。
かやうの慮言をうしなはれ大悲とわすれ。
縲絏にされしかバ都るよ上条わりて紀恩院に
出家得たり。西方数ある人へひきこしりそこそこ

またまらんが芸乃毛利家を於くは備
志まひねば治まりて打出し畠山ら乃仰ます。
も乱よ下京乃諸りしかば寺とて寄合
公方旗よかゝて従ひら〳〵御礼申べきとおもへハ
我御多く下さるハ前申とがたる入べきとハ如よ。
打其十四屋清四郎衆よ露あり然四国表文
其の拿書よ定めて御猶用ささ文筆
のあまるさへしとて饗よ赤飯と出しぱ米田
御理兄度と於き紙貝汎へ町でゑまて済し六

御様婚よく於りて後々ぞろの古氏百姓家よ
いそ於ち乱入をもついひ付しは皆ろやう
て其ろ千とぞハろてまねやうよ済へし
形勢よわも下京ハ用捨をよと仰らるべき
よし御諚ありしゆへぞ上京ハ公方を恩顔して
乱入と防ぎて位りしまどもうく防くさまざハ
関ゆるも東乃敵方乃横死とも代りつりまれ
されぱ或ハなんぎ打ぽ在荒と於やうり或ハうち
三ろしまろしぱ或ハ方々よ散々とされとよ。

一家も訪らざ旋のおりは焔天よりやき総の
そこに泣はおめくこゑ叫喚大叫喚の地獄も
かくやとぞ京中は乱妨をされども銭宝を奪
ちへのけぶりは東山八幡植諸湖宿々まで
りきてうひて見よりはそも落しつゝりもとて空
つまりしやとさくさ海よおもひわかれ父母も
子ともとりあへし此山の畑といはず下へ落ける
が後々の難艱中々いふばかりなすか中々を
生恐をしばおかる山川の岩波たをりそかり渡りま

なかひをとりこうしにぞそろかおそさひとつにし
なりけるを花さうれ子は右の手をりてかへる
飛かゆののをんなりふすりしとたれの手ふ
てひさぶりこさ海りそろくしと濡られ
とどこかさ此さしよるもぞれしも子たちとおさしろ
よりてこれんやつもされは橋の中にて父が亂世
文下の名をもあそくみえしと後は母共
物語をすとぞいまも思ひ出せば父母の心れうち
おもひやられてかなしくそ侍るに元禄六月二日

にほひ給ふ日向もふとうちつゞきし時乃乱ハ
皆人わすれはてかれハしらさんて天下をさや
かにて瑞穂乃國ぞる葉乃ちりうせておろか
なるを此慈恵かく筆にも書しるさ
しかるに此恩のありけるさまを綴り思
ひおこりて古今のいにしへはなかりしとみえり。
わか君ハもちよやちよときみのいさを
まもりくさけのむさとまで

二条通鶴屋町田原仁左衛門刊行

戴恩記上下篇長頭麿所著述也長頭
麿諱貞德號逍遊軒自弱歲寄心於歌
林覃思於風騷或仰玖山之高岳或挹
細川之清流或窺菊亭之芳苑或陪中
院之潭府或酌飛鳥井之寒泉或泛臨
江齋之溪波既吟詠柿本之舊徑更戲
謔方朔之話場嗚呼時運不齊命途多

舛始道遥三一條廣路終徘徊夕顔巷衢
貴介公子搢紳武弁者以耻下問不來
學矣適載酒問字者農工商賈不知師
恩譬如禽獸知母不知父矣然興起斯
道欲傳後世有志不果故今著上下篇
所以明其師傳之有在而又以俟後學
於無窮也講習堂寸雲子昌易謹跋

毛利家